

大竹文雄 著

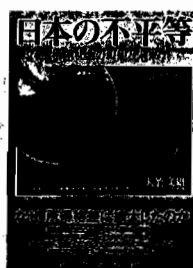
『日本の不平等』

——格差社会の幻想と未来

白波瀬 佐和子

本書は、現代日本を代表する労働経済学者の一人である著者が、これまで蓄積してきた不平等、格差に関する研究を一つの著としてまとめた骨太の研究書である。最近、過激なタイトルやメッセージが横行するなか、研究書としての緻密さと議論の厳密さを兼ね備えた本書は、現代の経済社会を見る上の「エポック的な作品」といえる。著者によるこれまでの研究から多くを学んできた者にとっては、「ついに出了か」という感を否めない。

本書は、「所得格差は拡大したのか」という最も基本的、かつ核心的な問いから始まる。活発化する不平等化論や格差論において、この問いに対する明確な答えがでないままに、不平等化論がイメージの中で拡大再生産されたきらいもある。一見簡単なこの問いは、答えようとするとき意外と一筋縄ではいかないと感じる。



●日本経済新聞社
2005年5月刊
A5判・308頁・3360円
(税込)

●おおたけ・ふみお
究所教授。
大阪大学社会経済研

格差といっても、どこの格差をさしているのか。時系列的に変化を見た場合に、どの時点からどこまでの変化をいっているのか等、単純なようで実は複雑なこの問いを、著者は一つずつ丁寧に紐解いていく。各章の構成は、具体的な問いをはじめにたてて、マイクロデータ分析がその後に続き、分析結果が再度まとめられて解釈・結論へと導かれる。経済学者でなくとも、著者の周到な分析ツアーに引き込まれていく。著者のはっきりした問題意識とそれに基づく明快な議論展開が読者をひきつける。

実証データでみた変化と人々が認識する変化は必ずしも整合するわけではない点に着目して、「誰が格差を感じ」「誰が再分配政策を支持するのか」といった人々の認識構造を明らかにしたことは、本書をこれまでの経済学を越えてユニークなものとした。事実、1990年代に入って格差論が活発化したわりに、所得格差の程度は実証データから見る限りそれほど大きく変化したわけではない。なのになぜ、人々は格差が拡大したと認識し、世の中は不平等だと声高に訴えるようになったのか。著者の高度な分析能力を最大限に駆使して、実態と意識の橋渡しを試みられる。

本書は、所得格差の変化（第1章）、所得格差拡大に関する認識（第2章）、高齢化と格差（第3章）、再分配効果（第4章）、再分配政策への支持（第5章）、賃金格差の変化（第6章）、ITと賃金格差（第7章）、労働市場における世代効果（第8章）、成果主義と労働意欲（第9章）、年功賃金への選好（第10章）、と経済的不平等についてのきわめて今日的なテーマが網羅されている。章を追って、本書の内容を簡単に紹介しよう。

1980年代を中心とした所得格差の拡大は、その多くが人口高齢化に伴う「みせかけの格差」に起因し、各年齢内の所得格差はそれほど拡大していない。不平等の程度が高い高齢層のサイズが大きくなったことで、世の中が不平等になったかのように見えたにすぎない。高度経済成長期に同質的な若年層が参入したことで全体の不平等度は低下したが、その世代効果は近年逆転して高齢層が大量に参入することで不平等度が拡大していった。同じ世代効果でも時代によってその方向が異なる。

誰が所得格差の拡大を感じているのか。これまで、あたかも日本の国民全員が所得格差の拡大を感じているかのような議論が多かったが、実はそのような本や雑誌を読む読者層や格差論を語るものは、全体社会の中ではごく一部にすぎない。日本人が全員所得格差を同じ程度に感じているわけではない。高学歴・高収入層は低学歴・低収入層よりも格差拡大をより敏感に認識するが、格差拡大を問題だと位置づけることはしない。格差が拡大したと敏感に感じることと、格差拡大を問題視することとは同一ではない。

政策的な観点から所得格差を捉える試みとして、所得再分配政策に注目する。最近の再分配政策を通して、年齢階層内の不平等度が低下し、若・中年階層の租税・社会保険料負担の上昇を通じて年齢階層間の格差が縮小した。言い換えれば、再分配政策は世代間の所得分配に一層関与してきたといえる。しかし、最近の不平等度拡大は人口高齢化という外生的な要因によるところが大きいので、高齢層の所得不平等度が低下しない限り、真の再分配政策効果とみなすことはできない。全体の不平等度が低下したということだけで、再分配政策の効果を評価することは不十分である。

では、誰が所得再分配政策を支持するのか。再分配政策強化を強く支持するのは、男性、低所得層、あるいはリスク回避度が高い者である。また失業経験のある人ほど、再分配政策を支持しやすい。これらは自らがどの程度所得リスクを保有しているかによって、人々がもつ政策への期待が左右された結果と解釈できる。

次に、賃金格差についての議論が続く。1990年代に入り、大企業を中心に成果主義的賃金制度が導入されて、賃金格差が拡大したのではないかという見方が広まっている。しかし、実際は90年代以降、賃金格差はそれほど拡大していない。それなのになぜ、人々は格差拡大を感じるのか。その理由として、第一に大卒中高年層での格差が拡大し続けていること、第二に、1990年代末、男性の正規労働者全体に実質賃金の低下が認められ、それは低賃金層において特に大きいこと、さらに第三として成果主義の導入が将来への不安（格差拡大）を予想させていること、の3点があげられる。必ずしも客観的な全体の傾向を把握して格差や不平等を人々は認識しているのではない。これまで雇用不安とは無縁であったかのような大卒中高年層において賃金格差が広がっている。中高年期の賃金の上昇をほぼ確実なこととして人生設計してきた既得権の揺らぎは、人々を不安にする。

働き方にも変化がある。IT技術の導入は、雇用者内の賃金格差を広げるのであろうか。パソコン使用の賃金への効果が認められたのは、高学歴男性の正社員のみであった。ITそのものが賃金に影響を及ぼすというよりも、パソコンを使用する一定の「スキル」を保有している者の間で、新たな技術革新に対する対応力が賃金となって反映される。したがって、ITが導

入されたことで新たな賃金格差が生まれたというわけではない。

世代サイズがもたらす賃金への影響にも言及する。世代サイズが大きいほど賃金の低下をもたらすといった単純な関係ではなく、世代サイズと賃金との関係は高卒者のみに認められる。勤続年数の短縮傾向も高卒者にのみ認められ、大卒者の間で明らかな労働市場の流動化は認められない。一方、就職時点でのマクロな経済状況がその後の個人の賃金プロファイルにも持続的な影響を及ぼすという点は、マクロな影響とミクロな影響の帰結として極めて興味深い。

1990年代に入り成果主義がもてはやされるようになったが、成果主義制度の導入だけではかえって労働意欲をそぐ結果にならないとも限らない。新たな制度導入に見合った実質的な働き方、制度の運用環境の整備があってこそ、制度が生かされる。成果主義の導入が必ずしも全員の労働意欲を一律に高めるわけではない。最後に、成果主義に対抗する雇用システムとして年功賃金制度を取り上げ、なぜ、また誰が年功賃金を選好するのかが議論される。多くは将来生活水準が上がることを楽しみとしたり、労働意欲を維持するために、年功的な賃金プロファイルを支持する。

以上、本書を読み終えて学んだことは、不平等、格差といってもその中身はそれほど単純ではないことである。不平等のトレンドを見るにしても、また不平等化を感じるものを特定化するにせよ、上がったか、下がったか、という一律のトレンドが明らかになったわけでもないし、人々は一様に特定の意識を共有するわけではない。

さらに本書は、これまで経済学者があまり扱ってこなかった意識の問題に正面から取り組んでいる点で貴重である。経済的不平等、所得格差はこれまで経済学の分野で多くの蓄積があるが、一体その不平等、格差は「何を意味するのか」というところにまで踏み込んだ研究書は少ない。その意味で本書は経済学を越えて

社会科学すべての領域に影響を及ぼす研究書となることは疑いない。不平等、格差に興味のある者すべてに、必読の書である。

最後に、読者というのは良書に出会うと欲求水準がどんどん上がっていくのが常であるが、今回もご多分に漏れず欲張りなお願いを三つほどしたい。まず、本書は「日本の不平等」とズバリ銘打って、格差や不平等の問題に正面から取り組んだ優れた研究書である。しかし、「格差」と「不平等」が何ら説明なしに互換的に使用されている。両者は完全に「別もの」ではなく、結果として互換的に使われていることも多い。これは評者の社会学者としてのこだわりすぎなのかもしれないが、格差と不平等をどう位置づけているのか、経済学者の見方を伺いたかった。

第二に、意識に関する分析、特に年功賃金に対する選好についての分析において、説明変数に疑問が残る。本書が個人の意識についても言及した経済学書としてユニークであることはすでに述べた。しかし、個人の意識（選好や支持度、等）をまた別の意識変数で説明することに疑問を感じる。「生活水準を年々上げていくことは楽しみ」だと思っている人ほど右上がりの賃金プロファイルを選好する、という結果を社会科学的にどう意味づけるのか。意識を意識によって説明することの限界や危険性が潜んでいるように感じられる。

第三に、本書は各章が独立しており、それ自身として完成された一本の論文である。しかし、単刀直入に「日本の不平等」と銘打った本書を貫く著者からのメッセージを、最後に聞きたかったという強い思いが残った。緻密なデータ分析に基づいた周到な議論展開の末に見えてきたものは何か。ぜひとも伺いたいところである。

しらはせ・さわこ 筑波大学大学院システム情報工学研究科助教。社会学専攻。